

スキーオリエンテーリングに思いを寄せて十数年。果たして冬季オリンピック登壇に貢献できただろうか。会場の雪は解け、ルスツが分水嶺となり太平洋と日本海に分かれて流れ去る。大会を支えたスタッフも期間の途中で去った者が居る。老兵もまた皆の記憶から静かに消えるでしょう。



競技責任者 武石雄市

真室川で試してみよう！

日本代表選考会は例年通り一般参加レースも併設して山形県真室川で開催した。真室川大会の目的は二つあった。

一つは日本代表選手選考である。強化選手指定の中から、男女最大各7名このレースの成績で決まる。従って個人3種目の開催は必然である。適当な時期に3連休がなく、2日間に3種目のレースを行うこととした。

もう一つの目的は、プリンター等の機器やコントロール、スタート方法、マップ交換、フィニッシュ要領等々、本番の懸念事項を試すことである。

実行委員会の予算が潤沢であれば所

要役員を集めてシミュレーションをしたかったが、遠慮がちの提案は無碍にも理解が得られなかった。結局、ITパート数名が自発的に視察を兼ねて真室川入りし、宿泊費は大会参加者も集まらず大赤字の主催者が負担した。その補填に大里真理子氏からご寄付を賜ったことを付け加えます。

さて、真室川で試行した主なものを紹介する。読者はヨーロッパで行っていることを模倣でよいと思うでしょうが、ヨーロッパの大会とてこれまでも完璧なもの無く、それぞれ一長一短があり、この機会にコストダウンを最優先に選手の安全と作業効率を目指し日本独自の方式としてSEAの承認を受けることが狙いでした。

試行1 コントロール設置材料と方法

①森林利用で設置する場合、

2本の立ち木を利用し、ロープに強固な張力を持たせ、2個のユニット、フラッグ、コントロールナンバーをロープで吊り下げた。結果は天張ロープの高さとユニットの吊材料の改善が必要と判明。

②立木がまったく無い場合

白竹を用いてトラストアングルを2箇所を組み、その上に竹を渡しロープを天張、①と同様な方法とした。試行結果、竹のトラストアングルは風雪や錯雑な地面(雪面)に対応でき、材料も軽量で運搬用意であり、積雪量に応じて高さを調節可能であり採用決定。

試行2 マップ交換所の設置

従来からマップ交換所の材料で完璧なものがなく、最大の悩みであったので常に気に掛けながら出入りしていたホームセンターで「クラクタイト」を見つけました。

雨にはともかく、少々風にはバックネットの利用で解決でき、自信を持って採用決定。

懸念した冠動脈痙攣の再発

コースプランは高島和宏氏、2週間前にコースの概略を決定、テープ巻きも結局天候急変で未完了、高橋仁紀氏が一番気にしていた堅牢トラック設定も1週間前から毎日早朝、出勤時間まで走り回ったが、コントロールの設置が一人なので予定通りに進まない。

時には予定の作業が日没までに終わ

らず真冬の19時ごろまで真っ暗な森の中を高橋氏とモービルで駆け回り、さすがの私も寂しい思いをしたことを思い出す。

そこに突然飛び込んできたのが内山氏の訃報。内山婦人からいの一歩に電話があり、直ちにMLで全国に流した。通夜か告別式には参列しなければと考えたが、福岡まで往復二日間、筆者が真室川から居なくなることはこの大会が無くなることを意味した。そのことは内山氏のスキーOにかけた遺志に背くことになり泣く泣く断念した。

真室川大会の準備遅れを余所にSWOC実行委員会MLでは何かとルスツへの要求が飛び込んできていた。

普段を装ってはいしたが、我ながらストレスは高くなっていただろうと思う。準備の遅れを挽回するためスキーで資材を運んでいると、昨秋に勃発した心臓の調子に変調を感じるようになり自律神経を刺激し更にストレスになった。

主治医から服薬で再発は無いと言われていながらも本気で心配した。

裏で表舞台を支えた人たち

華やかな競技を演出している陰で、毎日のように翻弄に耐えたスタッフがいた。選手の安全を最優先としてルールに忠実を誓い競技の公平を絶対として不成立の回避に全力を注いだ。

翻弄の発信先は読者の想像にお任せするとして直接的に影響を受けたスタッフを述べて見ます。

高橋仁紀 (トラック設定チーフ)

彼は1996年リレハンメル大会の日本代表選手であり2004年もがみ国体のコース部長。山形県真室川から一人軽自動車でいち早くルスツに乗り込み、到着早々からスノーモービルでトラック設定に奮闘した。片斜面の急坂にマシンがひっくり返らない幅員にする作業は、雪を削る作業が連日続き、まるで土木作業員だと嘆いた。

選手の滑走をイメージして毎日黙々と堅牢なトラックの維持に努めた。

大会期間中は、早朝の5時にはキャップライトを点けてトラックネットを踏みまわり、スタート開始時刻まで何事も無かったように会場に戻ってきていた。

悪天候を押して競技を続行したミド

ルディスタンスでUSA女子選手の一人フィニッシュが遅いのを心配し、いち早く捜索・救出体制をとったのは彼の豊富な運営経験から咄嗟の判断であった。

彼はリレー終了を見届け、そそくさとルストを後にした。

高島和宏 (コースプランナー)

コースとコントロール位置をフィンランドからの助っ人に最後まで踊らされ、睡眠時間をもっとも少なかった一人である。

コントロールの事前設置では現地です突然の位置変更により振り回され、時間を浪費しても温厚に対応していく姿は、国内大会の豊富な運営経験からくるものであろう。

ロングディスタンスの前夜は一睡もしていない。彼はリレーのコース印刷が完了すると閉会行事を待たずしてルストを離れた。

酒を嗜まないが、ベストの評価を彼と分かち合い、ともに喜べなかったことが残念であった。

幸山敏克 (スタートチーフ)

ロングレースのスタート直前、マップ配布方法変更を組織の直系以外から指示され、緊急に付近の役員をかき集めて分担配置し、冷静にそして懸命にパニックを回避した。マススタートは設定時刻どおり何事も無く進んだ。

ミドルレースのスタート間隔は2分がルールである。本大会は何故か明確な理由が無く1分で公然と準備されている。前夜のチームオフィシャルミーティングでスタートリストを発表後、スタート間隔変更に賛同しないチームがあり2分間隔スタートと決定された。スタートパートとしては2分間隔には余裕で対応した。

彼の冷静な対応は、教師の職業柄と3回のWOC代表のなせる業か。

徳野利幸 (スタートスタッフ)

愛媛県在住。西日本ではコントローラーとしてお馴染みである。今回はボランティアスタッフとしてルスト入りも皆より早く、器具の準備とスタートパートを担当。特に激しい風雪が吹きすさぶミドルレースで、SEAから突然スタートフラッグの位置に配置をされた。競技部としても予期しない配置であり交代要員もいない中、長時間の寒冷な吹雪に耐えて任務を全うしてくれた。

福田良雄 (ゴール・マップ交換)

山口県に在住、オリエンテーリング

会では苦勞を厭わず幅広い活動とアイデアマンとして知られる。準備委員会からのメンバーであり、懸案事項であるマップ交換所アイデアを期待したが、高島氏がEユニットのぶら下げ材料に興味を示し、得意技を発揮してSEAからグットと評価された。

ボールのドリルをはじめ、持参した多くの道具は人知れず助けてくれた。

マップ交換所の設定も当方の構想を最後まで言わせないうちに理解し、白竹とゴルフネットを使いクラクタイトで完成させたセットは風雪に耐えて見事に目的に合致させてくれた。

心配だったことは、機敏に動くあまりレース中の選手と接触寸前の行動があり、レース妨害のクレームが出ないかははらばらだった。筆者はクレームの心配のあまり、声を荒げて注意したことを深く反省しています。

リレーのレイアウトは制約されたエリアを信原氏と共同でこれ以上は望めないほどの配置をした。

酒井克明 (フィニッシュ)

夜は会計、日中はフィニッシュに張り付き選手の腕を追いかけてペナチェックに駆け回った。

彼を悩ませたのはフィニッシュユニットのコードが短かったことである。ラストコントロールからフィニッシュまでレーンは2m幅で3レーンあり、選手がフィニッシュと同時に力尽きて倒れるとチェックが至難であったことである。カメラを持って集まるメディア以外の役員も邪魔だった一因が見られた。

宮川達哉 (用具デポ監視、ラジコン)

JOA強化委員長としてフットOのNTには永年貢献されている。スキーOにも造詣が深い。

今回はボランティア役員として駆けつけていただき、スキー等のデポジットに一人で張り付けてくれた。デポコンは全ての選手が通過するので有名選手をまじかに見れて喜んでいて、各レースのラジコンも担当しライブアナウンサーを助けたことは知るものがないだろう。

的場洋輔 (ITチームチーフ)

筆者は彼について多くを知らない。しかし、今や日本で彼なくして国際大会の開催は難しいほどその存在は大きなものがある。

今回、大会が成功と評価された場合、その貢献度はITチームの占める割合が大きいと思います。

木村佳司 (国内アドバイザー)

国内のオリエンティアなら誰でも知っている有名人である。

SWOCを開催するに当たって国内にコントローラーの不在に気がつき2年半前、彼に就任を要請した。

スキーOの国際経験が無いので心配したが、2007年モスクワ大会にチームオフィシャルとして参加、SEAクリニックで研修を積み重責を果たしてくれた。

今回は、アドバイザーより地図印刷で高島氏を援助しその貢献度の方がかなり大きい。

一方、Oマガジン編集長でもあるので、会場には所在していたが取材に専念している時間が多く見られた。おかげで本誌の前号をスキーO記事で賑わしてくれた。

信原靖 (作図、渉外諸々)

JOA理事であり、加森観光(ルストリゾート)社員である。彼が社員でいなければこの大会のルスト開催はなかったであろう。

それ故に彼への要求は複雑多岐であった。それをこともなげに見事にこなしたのは彼の能力である。筆者はスプリントレースが終わった夜、加森社長のお誘いを受け親しく懇談し、社長が彼に対する信頼度合いの大きいものを感じた。彼がルストに居る限りスキーO大会は継続するであろう。

他パートに比して地図に予算配分が考慮されたが、歪んでいた原因を見事SEAを納得させる地図を完成させた苦勞は彼のみぞ知る。

筆者 (一応 競技責任者)

英語力が皆無。競技規則の翻訳も無く、勇んで運営に参画した良否を深く反省した。

兎に角自分の身の不安を押し付けて行動した。コントロールの設置しているときが一番幸せを感じた。

スタッフミーティングはどうにか仕切った積もりだが、部門以外に連携の不毛を感じ、毎日責任から来る孤独感に襲われ、パンケットの後は部屋に一人でこもった。

冬季オリンピックの登場を夢見て、IOFの日本開催要望に応えた今、15年の長きに携わったスキーオリエンテーリングであるが、JOAスキーO委員長としての筆者の役割は終わった。

(武石雄市)